

蘇軾と黄庭堅

——文房四宝（筆・墨・硯・紙）に対する見解を比較して——

長尾 秀 則

一 はじめに

二 筆に対する見解の比較

三 墨に対する見解の比較

四 硯に対する見解の比較

五 紙に対する見解の比較

六 結 言

蘇軾と黄庭堅——「蘇・黄」と並称され、書道史の上で、意を重視する立場（人間の個性を重視する立場）の代表として、常に一つのまとまったものとされてきた二人であるが、その文房四宝（筆・墨・硯・紙）に対する見解を比較してみると、共通点と共に、多くの相違点が存在する。従来、両者の詩の方面に関する研究はかなり以前からなされていたが、書とその周辺に関する研究は、まだそれほどなされてはおらず、二人の比較が論じられることも、それほど多くはないように思われる。

本稿は、主に題跋中に表れた、蘇軾と黄庭堅の文房四宝観の共通点と相違点を探り、同じ革新派と言われながら、大きくその見解が異なる原因を究明しようとして試みている。

一、はじめに

前稿、「蘇軾と黄庭堅——書に対する見解を比較して——」（『京都語文』第二号、佛敎大学国語国文学会発行）において、私は主に題跋中に表れた、蘇軾（一〇三六—一〇八一）と黄庭堅（一一〇四—一一〇五）の書道観（書に対する見解）の共通点と相違点を探った。本稿ではそれを基礎に、筆・墨・硯・紙——いわゆる文房四宝に対する両者の見解の共通点と相違点を題跋中から究明したい。

蘇軾と黄庭堅にとって、書に対する見解は、両者を書家としてみた場合、より根本的な問題を含んでいて数多く述べられていると思われるが、文房四宝に対する見解は、かなり趣味的な要素が強く、興味がある場合は多く述べられているが、興味がない場合には、ほとんど述べられないことのない。興味があり、多く述べられていれば、その内容から究明できるであろう。また、興味がなく、あまり述べられていない場合には、その原因を考察することにより推定することが可能と思われる。

なおテキストは、津逮秘書本『東坡題跋』・『山谷題跋』を底本とし、真蹟の存するものは、それを参照し、他の諸本によって校勘を行った。また、旧字体は、新字体のあるものについては、改めた。

以下、蘇軾と黄庭堅の文房四宝（筆・墨・硯・紙）に対する見解を比較してみよう。

二、筆に対する見解の比較

ここでは、蘇軾と黄庭堅の〈筆〉に対しての見解を題跋から探り、比較してみたい。

まず、蘇軾からみてみよう。宋代には、諸葛高という製筆の名人がいたことが諸書に記してある。当時の一流の文人が口を揃えてその技量を賞し、諸葛高の作った筆を愛用した。蘇東坡の題跋で、諸葛氏の作った筆について記してあるものは、筆についての記述がある十八則中の七則に及ぶ。「諸葛筆を書す」（『東坡題跋』）の一則では、

宣州諸葛氏筆、擅天下久矣。縱其間不甚佳者、終有家法、如北苑茶、内庫酒、教坊菜、雖弊精疲神、欲強学之、而草野氣終不可脱。

（宣州の諸葛氏の筆、天下に擅なること久し。縱ひ其の間に甚だしくは佳ならざる者もあるも、終に家法の有ること、北苑の茶、内庫の酒、教坊の菜、精を弊し神を疲れしめて、強ひて之を学ばんと欲すと雖も、草野の氣、終に脱すべからざるがごとし。）

として、「宣州（安徽省）の諸葛氏が作る筆は、長い間、天下第一の名声をほしいままにしている。」と明言し、北

苑茶（福建省建甌県の東で作る茶）・宮中の倉で作る酒・都にある政府が管理している音楽などにぞらえて「他の人がひたすら一所懸命に努力して無理にそれを学び取ろうとしても、やぼったさをなかなかなくすることができないようなものだ。」と賛美している。同様に、「諸葛の散卓筆を書す」（『東坡題跋』）の一則では、

散卓筆、惟諸葛能之。他人學者、皆得其形似而無其法、反不如常筆、如人學杜甫詩、得其粗俗而已。

（散卓筆、惟だ諸葛のみ之を能くす。他人の學者、皆其の形似るも、其の法無く、反って常筆に如かず。

人、杜甫の詩を学ぶも、其の粗俗を得るが如きのみ。）として、「ほかの人が諸葛氏をまねて作った筆は、みな形が似ているだけで、正しい方法を取り入れていないので、普通の筆にも及ばない。」とし、杜甫の詩になぞらえて、諸葛氏に常人が及ばない点を記している。蘇軾は、諸葛筆を非常に高く評価し、愛用していたことは、これら題跋により明らかである。

その他、宋代には有名な筆工があまっていたが、呉説筆・郎奇筆・程奕筆を良い筆として蘇軾はあげている。

良い筆というのは、自由自在に書けるという点も大切であるが、長く使用できるという耐久性もみのがすわけにいかない。蘇軾も「都下の熟毫を記す」（『東坡題跋』）の一

則では、

近日都下筆皆円熟。少鋒、雖軾美易使、然百字外力輒衰。蓋製毫太熟使然也。鬻筆者既利於易敗而多售、買筆者亦利其易使。惟諸葛氏独守旧法、此又可喜也。

（近日、都下の筆、皆円熟す。少鋒、軟美にして使い易しと雖も、然れども百字の外、力輒ち衰ふ。蓋し、製毫、太熟にして然らしむるなり。鬻筆なる者は、すでに敗れ易くして多く售るを利とし、筆を買ふ者も、亦た其の使い易きを利とすればなり。惟だ諸葛氏のみ独り旧法を守る。此れ又喜ぶべきなり。）

として、「近ごろ都のあたりで売っている筆は、みな十分に使いやすくしている。小さな筆はやわらかく、使いやすいのであるが、百字以上書くと、力が衰えてしまう。」と述べ、諸葛筆が旧法を守って作られ、耐久性がある点を良しとしている。また、「王定国の、呉説に贈る帖に書す」（『東坡題跋』）にも、

去国八年、帰見中原士大夫、皆用散毫作無骨字。買筆於市、皆散軟一律。惟広陵呉説独守旧法。王定国謂往還中無耐久者、呉説筆工而独耐久、吾甚嘉之。建中靖国元年五月二十日、東坡居士書。

（国を去ること八年、帰りて中原を見るに、士大夫、皆散毫を用いて、骨無きの字を作る。筆を市にて買ふ

に、皆散軟にして一律なり。惟だ広陵の呉説のみ、独り旧法を守る。王定国謂ふ、「往還の中に久しきに耐

ふる者無し。呉説筆、工にして独り久しきに耐ふ。吾甚だ之を嘉しむ。」と。建中靖国元年、五月二十日、東坡居士、書く。）

とあり、呉説筆が昔からの方法で筆を作り、耐久性があることを蘇軾は良しとしている。蘇軾はこの文章を書いた後、間もなく大病を起し、同年（一一〇一年）七月二十八日、常州（江蘇省）で没している。よって、蘇軾の晩年には、散筆（やわらかい毛の筆）がはやっていたことになる。しかしまだ、旧来の筆作りもなされていたことになる。羊毛筆が全盛を極めるようになるのは明代末期になってからであるが、散筆のはしりが、このころあらわれたとみることができよう。

では、旧来の筆作りとはどのようなものであったのであろう。「古人の繫筆を記す」（『東坡題跋』）には、昔の人の筆の作り方が記されている。それには、

繫筆当用生毫、筆成、飯甑中蒸之、熟一斗飯乃取出、懸水甕上数月乃可用。此古法也。

（繫筆には当に生毫を用うべし。筆、成れば、飯甑の中にて之を蒸す。一斗の飯を熟し、乃ち取り出して、水甕の上に懸けること数月にして、乃ち用うべし。此

れ古法なり。）

とある。「筆を作る時には新しい毛を使わなければならない。筆ができあがると、竹製のこしきの中でむす。一斗の米をむしてから取り出し、水がめの上につるして数か月たつと使用することができる。これが古くからの方法である。」——詳細はわからないが、諸葛筆や、呉説筆も、これに近い作られかたをしたと思われる。

また、良くない筆についても蘇軾は記している。「錢塘の程奕筆を書す」（『東坡題跋』）には、新味を出すため、師匠の教えをうけつがたい筆工について嘆いていることが記されている。また、「嶺南筆を書す」（『東坡題跋』）には、嶺南（広東省）によい筆がないことを嘆いている。南方では筆の毛の良いものがとれないのである。また、「孫叔靜の諸葛筆を書す」（『東坡題跋』）の一則には、海南島に長らくいて、持つて行った筆はみなくさってこわれ、にわたりの毛の筆を使うほどまでになっていたことが記されている。海南島での生活は、筆についていえば、最悪のものだったのである。

なお、「黄魯直の郎奇筆を恵するを書す」（『東坡題跋』）には、黄庭堅が郎奇筆を蘇軾にあげたことが記されており、また、「魯直の蔵する所の徐偃筆を書す」（『東坡題跋』）には、黄庭堅が蘇軾に徐偃筆（筋はあるが骨のないくねくね

した筆」を試みさせたことが記されており、興味深い。

では次に、黄庭堅についてみてみよう。筆に関しては、あまり題跋には記されていない。黄庭堅はあまり筆そのものには興味がなかったようである。「張載熙に与ふるの書巻の尾に跋す」(『山谷題跋』)には、

凡学書欲先学用筆、欲双鉤回腕、掌虚回腕、掌虚指実、以無名指倚筆則有力。

(凡そ書を学ぶには先づ用筆を学ばんことを欲す。用筆の法は、双鉤回腕、掌虚指実ならんと欲す。無名指を以て筆に倚せれば、則ち力有り。)

とあり、「およそ書を学ぶにはまず用筆を学びたいものだ。」と明言し、「用筆の法は双鉤回腕で、掌の力をぬき指に力を入れるのである。ぐすり指を筆によせれば力強くなる。」と、用筆(技術)に興味を示し、その執筆法を具体的に示している。このような、用筆に関する則は、多数存在している。どうも、黄庭堅は筆そのものよりも、その筆をどう使うかという用筆(技術)の方により強い興味を持っていたようである。ただ諸葛高の使った筆には蘇軾同様、一目おいていたようで、「黔州の時の字を論ず」(『山谷題跋』)には諸葛家流の散卓筆で試し書きをした記事がみえる。ただしこの場合も、諸葛家流の筆だからという意識はあまり働いていないようである。よい筆にこしたことはな

いが、より興味は技術に向いていたといえる。先ほどあげた「張載熙に与ふるの書巻の尾に跋す」(『山谷題跋』)の最後で、黄庭堅は次のように書いている。

一日飲屠蘇、頗有書興。案上有墨藩、而佳筆莫在。因以三錢雞毛筆、書此卷。由知者卷之、在手不在筆哉。(二日、屠蘇を飲み、頗る書興有り。案上、墨藩有るも、佳筆の在る莫し。因りて三錢の雞毛筆を以て此の巻を書す。知る者由り之を觀れば、手に在りて筆に在らざる哉。)

これによれば、「書のよしあしは、その人の力量によるのであって、筆によるのではないのだろう。」と、筆そのものより用筆(技術)に興味があることを明示している。

なお、「東坡の書せる帖後に跋す」(『山谷題跋』)には、蘇軾が宣城の諸葛の齊鋒筆で字を書いていたとし、「東坡の筆を論ずるに跋す」(『山谷題跋』)にも、蘇軾が宣城の諸葛家の筆を使用したとあり、蘇軾の題跋を裏付ける則として興味深い。そして、「東坡の筆を論ずるに跋す」(『山谷題跋』)には、「東坡、双鉤懸腕を善くせず。」として、二人の筆法の決定的に異なる点(おそらく蘇軾は単鉤を、黄庭堅は双鉤を得意としていたと思われる。)が示されている。

このように、蘇軾は多面的に筆に関しての題跋があるの

に対し、黄庭堅には筆に関しての題跋が少なく、あっても筆法(技術)に、より興味の重点があつたことがわかった。しかし、技法に興味があれば、筆の研究も必要であり、もう少し多く記述があつてもよいようにも感じられる。

三、墨に対する見解の比較

ここでは、蘇軾と黄庭堅の「墨」に対しての見解を題跋から探り、比較してみたい。

蘇軾は、文房四宝(筆・墨・硯・紙)のうち、特に「墨」に愛着が深かった。テキストによれば、筆(十八則・墨(三十五則)・硯(十七則)・紙(四則)が題目として挙げられており、数の面からみると、「墨」に関しての題跋が群を抜いて多い。蘇東坡の「墨」に対する見解についての詳細は、拙稿「蘇東坡「墨」小考」(『國學院高等学校紀要』第二十四輯所収)を参照していただきたい。ここでは紙数の関係上、蘇軾の墨についての考えをまとめたものを示しておく。

- ① 「墨」についての題跋は、三十五則あり、そのうち年月日等の記載が何らかの形でなされているのは、七則を数えるのみであること。
- ② 年月日等の記載のある題跋は、すべて年月日順となっていること。

- ③ 「海南にて墨を作るを記す」のみは時刻まで記しており、異例であること。

- ④ 年月日等の記されている題跋は、すべて五十代、六十代のものであり、若年に墨について書いたものがあつたかどうか不詳なこと。

- ⑤ 文房四宝のうち、特に「墨」に愛着が深かつたと思われること。

- ⑥ 墨色は、黒いものを理想としたこと。

- ⑦ 墨には、清らかな光沢が必要としたこと。

- ⑧ 墨の香(特に麝香)を佳墨の一条件としていること。

- ⑨ 墨の形体・墨の型文様・墨の肌合については記述が認められないこと。

- ⑩ 蘇軾は、油煙墨も、松煙墨も、自ら工夫して造っていたこと。そして自ら造った墨に自信を持っていたこと。

- ⑪ 蘇軾は、おりにふれて、墨の混合等を行い、墨の研究をしていたこと。

- ⑫ 蘇軾の生きた時代は、松煙墨に、油煙墨が新たに加わった変化の時代であつたこと。

- ⑬ 「非人磨墨磨人」(人、墨を磨すに非ざるも、墨、人を磨す。)の一節が、愛墨家としての蘇軾の悲痛

な叫びであったこと。

このまとめからもわかるように、蘇軾が墨に対して格別な趣味を有していたことは、確かな事実である。墨に対する題跋の数も多く、内容も多岐にわたり、蘇軾でなければ書くことのできない精神が墨に強く反映していると思われる。

一方、黄庭堅も愛墨家として著名で、墨についての詩も多く、一墨を得ては歓喜する様がよく描写されている。しかし、今回対象としている題跋中には、不思議にもあまり「墨」に対する趣味は示されていない。

「翟公巽所藏の石刻に跋す」（『山谷題跋』）には、「淳化閣帖」に歙州の墨を使用したことを述べたあと、

元祐中、親賢宅、從禁中借版墨百本、分遺官僚。但用潘谷墨。光輝有余、而不甚夥黑。

（元祐中、親賢の宅にて禁中從り版墨百本を借り、官僚に分遺す。但だ潘谷墨を用う。光輝、余り有れども、甚だしくは夥黒ならず。）

とあり、潘谷墨に対し、「光沢はあるがあまり黒くない。」と記している。これは、版刻に使用した墨についての記述である。

また、「自ら書する所の与宗室景道に跋す」（『山谷題跋』）には、

れば則ち已む。亦た工拙と人の品藻譏弾とを計較せず。）

とあり、「私の書は本来、無法なのだ。」とし、「筆墨をえらばず紙があれば書き、紙がなくなればやめるのである。また、工拙とか人の品評、譏りなど考えない。」と、文房四宝に対する核となる一則を示している。つまり、文房四宝にはこだわらないという、基本姿勢が読みとれるのである。ただこの一則は、弟の幼安が書法を教えてくれといった時のものであり、技法にこだわりの、技法（筆法）を人格（精神）の上に置く考え方を多く述べていることからすれば矛盾するものと思われ、多少の芸術家的気どりがあつたのか、良くみれば、晩年に到達した心境として解すべきものなのかもしれない。

いずれにしても、同じ愛墨家とされる蘇軾と黄庭堅で、題跋においてこのように差が認められるのは興味深い。この差は、そのまま二人の墨に対する考え方の違いとも考えられるが、「題跋」というものに対する二人の認識の違いが大きく関係しているようにも思われる。

四、硯に対する見解の比較

ここでは、蘇軾と黄庭堅の「硯」に対しての見解を題跋から探り、比較してみたい。

翰林蘇子瞻、書法娟秀。雖用墨太豊、而韻有余。於今為天下第一。

（翰林の蘇子瞻、書法娟秀。墨を用いること太だ豊なりと雖も、而も韻余り有り。今に於て天下第一と為す。）

とあり、蘇軾の書を美しいものとし、「墨を非常に豊富に用いるが、余韻があり、今日、天下第一である。」と激賞している。ここで注目したいのは、筆に含ませる墨量について述べている点である。蘇軾の題跋にはあれほど墨に関する記述があつたのに、管見では含墨量については、認めることができなかった。技法を重視している黄庭堅だからこそ、含墨量という、より技法に直接関係してくる問題に着眼しているのだと思われる。

なお、筆墨をえらばないという基本的態度が、次の一則に述べられている。「家弟幼女の作せる草の後に書す」（『山谷題跋』）には、

老夫之書、本無法也。但觀世間万縁、如蚊蚋聚散。未嘗一事横於胸中。故不挾筆墨、遇紙則書、紙尽則已。亦不計較工拙与人之品藻譏弾。

（老夫の書、本と法無きなり。但だ世間の万縁を觀、蚊蚋の聚散するが如し。未だ嘗て一事を胸中に横たえず。故に筆墨を挾ばず、紙に遇へば則ち書し、紙尽く

まず、蘇軾からみてみよう。彼は、どういった硯をよしとしたのであろうか。「硯を書す」（『東坡題跋』）では、硯之美、止於滑而発墨、其他皆余事也。然此兩者常相害、滑者輒褪墨。

（硯の美、滑にして墨を発するに止む。其の他は皆余事なり。然れども、此の兩者、常に相害す。滑なるは、輒ち墨を褪ぐ。）

とある。「よい硯とは、なめらかで発墨がよいということにつきる。その他のことは、みなどちらでもよいことである。しかしながらこの二つは常に両立しない。なめらかなものは発墨が悪い。」としている。一般に、硯に対しては、発墨・石質・硯制・形態・彫琢・伝来などを考慮して、総合的にその真価を決定するのが望ましいように思われる。

しかし、蘇東坡は、「なめらかで、発墨が良い」点を重視し、他は無視して良いとしている。また、「なめらかさ」と「発墨の良さ」が両立しにくい点については、他にも同様の記述がみられ、この二点を兼ねそなえたものとして、龍尾石硯をあげている。龍尾石硯は、「なめらかでないが筆をいためないし、なめらかだが発墨がよい。」といった言葉がそのままではまるものと、大いに賞揚している。

その他、「鳳味硯を書す」（『東坡題跋』）には、四川省建州北方の鳳凰山からとれる石で作った「鳳味硯（鳳凰のく

ちばしの形をした硯」を歙州の龍尾硯より優れているとし歙州の人に憎まれたことを記している。そして、「鳳唼硯を書す」(『東坡題跋』)には、鳳唼硯を蘇軾自身が愛用しているとし、「呂道人硯を書す」(『東坡題跋』)では、呂道人の沈泥硯を貴重なものとしている。また、「許敬宗の硯を書す」(『東坡題跋』)では、許敬宗の旧蔵していた端溪硯についての記述がある。許敬宗は、唐代の人で、私利私欲を専らにした、好ましからぬ人物である。しかし東坡は、硯には罪なしとして、けがれを洗い落したいと願った。また、硯の箱は硯の美しさとは無関係とし、必ずしも所蔵しなければならぬものではないとした。このようなところにも蘇軾の人となりはあらわれているのである。蘇軾にとって、硯の来歴などは、関係なかったのである。

また、「唐林夫の恵する硯を書す」(『東坡題跋』)では、凸起のある端溪硯は、数百年たつて硯が平らになると、墨がうまくすれるようになると将来を考えて作っていると感じている。では、逆に、良くない硯とは、こういったものと蘇軾は考えていたのであろうか。「瓦硯を書す」(『東坡題跋』)では、

以瓦為硯、如以鉄為鏡而已。必求其用、豈如銅與石哉。而世常貴之、豈所謂苟異者耶。

(瓦を以て硯を為るは、鉄を以て鏡を為るが如し。必ず其の用を求むれば、豈に銅と石とに如かんや。而れども、世は常に之を貴ぶ。豈に所謂異を苟ふ者ならんや。)

として、瓦硯は良くないとしている。「青州の石末硯を書す」(『東坡題跋』)にも、石末硯という瓦硯を良くないと非難している。漢代から六朝時代、隋唐にかけては、石材の硯よりもむしろ瓦製の硯の方が多く用いられていた。宋以後は優秀な石硯が多く産出した。文人の中には瓦硯を石硯よりも愛重する者もいたが、蘇軾は、瓦硯を愛重しなかった。

しかし、瓦硯を良しとしなかった彼ではあるが、発墨の悪い硯を使うのはよほど我慢できなかったとみえ、「溜、端硯を書す」(『東坡題跋』)には、

用褪墨硯如騎鈍馬。數步一鞭、數字一磨、不如騎驟用瓦硯也。

(墨を褪くる硯を用ゐるは、鈍馬に騎るが如し。數歩にして一鞭し、數字にして一磨するは、驟に騎り瓦硯を用ゐるに如かず。)

として、「発墨の悪い硯を使うくらいなら、瓦硯を使った方がましだ。」と言っている。瓦硯は材質があらいいので、墨色はよくないが、はやくすれたのである。蘇軾はどちら

かといえば、墨色よりも、発墨を重視したということになる。総じていえば、実用性を重視したといえよう。

一方、黄庭堅の題跋には、管見では全く「硯」についての記述が出てこなかった。宋の文人はおしなべて愛硯家ぞろいで、黄庭堅に関しても硯に対する興味は多く持っていたであろうと思われる。そして、文房四宝の中でも「硯」はその代表といえる存在である。しかし、まるでさけるかのように、硯に関しての記述がないのはどうしてであろうか。思うに、やはり硯は、この四つの中で一番技法に遠い存在だったからではないだろうか。

蘇東坡にとって硯は、特に愛好する墨をする対象としてもその存在価値は高く、発墨など、実用に関連する部分での興味も多分にあった。しかし、黄庭堅になると、興味の対象に「硯」はなり得なかったことが題跋から推定されよう。

五、紙に対する見解の比較

ここでは、蘇軾と黄庭堅の「紙」に対しての見解を題跋から探り、比較してみたい。

まず、蘇軾からみてみよう。「紙」については、四則が題目として挙げられている。数の面から考えると、蘇軾はあまり「紙」に対して興味を示していないように考えられ

た。本当にそうであろうか。題跋の内容をみてみよう。

蘇軾は、四川省眉山県の生れである。蜀は、紙の良質のものを産した。「六合麻紙を書す」(『東坡題跋』)には、成都浣花溪。水清滑勝常。以漚麻楮作牋紙。緊白可愛。數十里外便不堪造。信水之力也。揚州有蜀岡。岡上有大明寺井。知味者以謂与蜀水相似。西至六合。岡尽而水発。合為大溪。溪左右居人亦造紙。与蜀産不甚相遠。自十年以來。所産益多。工亦益精。更數十年。当与蜀紙相乱也。

(成都の浣花溪、水、清滑にして常に勝る。以て麻・楮を漚して牋紙を作るに、緊白にして愛すべし。數十里の外、便ち信水の力を造らずに堪へざるなり。揚州に蜀岡あり。岡の上に大明寺の井あり。味を知る者は以謂へらく蜀水相似たりと、西のかた六合に至りて、岡、尽きて、水、発し、合して大溪と為る。溪の左右に居る人も、亦た紙を造り、蜀の産と甚だしくは相遠からず。十年自り以來、産する所益多く、工も亦た益精なり。更に十年を數ふれば、当に蜀紙と相乱るべし。)

として、江蘇省揚州の六合で作る六合麻紙について書いている。「四川省の成都の浣花溪は水が清くなめらかで、普通の水よりもすぐれている。そこで麻や楮をひたして牋紙

を作ると、非常に白くすばらしい。」として、「その蜀の水と、江蘇省揚州の六合の水が似ている。」としており、「十年もすると、蜀で作る紙と、みわけがつかなくなる。」としている。水の良し悪しは、紙に大きな影響をあたえる。浣花溪も、大明寺の井戸も、良質の水であり、それが良い紙をつくる要因だったのである。

麻紙は、唐初では盛行したが、抄くの手間がかかったため、多くの紙抄き場が楮やその他の材料に替えた。しかし、蜀中では永く蔡倫の遺法を守って麻紙を作ったので、天下に名を知られるようになった。また、宋・元の以前から、蜀中ではさまざまな粉飾を凝らした、いろいろな紙を作っていたことがわかつている。その背後に良質の水の存在があったのである。このように、蘇軾の生まれ育った蜀の地は、良質の紙の産地であった。

また、「布頭賤を書す」(「東坡題跋」)には、

川賤取布機余終不受緯者治作之。故名布頭賤。此紙冠天下。六合人亦作、終不佳。

(川賤、布機の余に取るは、経の緯を受けざる者、治めて之を作る。故に布頭賤と名づく。此の紙、天下に冠たり。六合の人も亦た作るも、終に佳ならず。)

として、四川省で取れる布頭賤について記している。「四川省で取れる紙は、布をおった時にでる糸くずを使って作

た時は異なり、使用した筆や墨も異なるわけであるが、同じ澄心堂紙に二人の書があるということは、二人の書風の相異を比べるのには、最も都合が良いわけである。

また、蘇軾の時代にも絹に書くことが行われていたが、すでに「絹紙」といったよび方がなされなくなっていたことが「鄭君乗の絹紙を書す」(「東坡題跋」)にみえる。そして、昔の人は海苔のりを使って紙を作ったというが、彼の時代にそのようなものはなく、また、蘇軾の時代の人は竹を使って紙を作っているが、昔にはそのようなものがなかったと、「海苔紙を書す」(「東坡題跋」)では述べている。しかし、中国では、竹紙はずいぶん古くから抄かれており、わが国でも、天平時代の文献にすでにみえている。蘇軾の思い違いであろうか。

一方、黄庭堅の題跋では紙についての記述はやはりほとんどないといってよい。ただ、前出の「家弟幼安の作せる草の後に書す」(「山谷題跋」)に、

故不挾筆墨、遇紙則書、紙尽則已。

(故に筆墨を挾ばず、紙に遇へば則ち書し、紙尽くれれば則ち已む。)

とあり、「紙があれば書き、紙がなくなればやめるのである。」と、紙に対してもこだわりのないことを記している。紙もやはり技法にこだわる者にとっては興味がない存在だ

っている。たて糸でよ糸を受けとめられないものを、うまく使って紙を作るのである。だから布頭賤という。この紙は天下で最もすぐれている。六合の人もやはり同じ方法で作っているが、まだ四川省で作っているものより劣る。」という内容である。布頭賤が実際どのようなものであるかは、わからない。しかし、六合(江蘇省揚州)の紙を良しとしながらも、四川省の紙を上位においている点は興味深い。蘇軾は紙については、かなり恵まれていたように思われる。実際、蘇軾の時代には、澄心堂紙という天下の絶品もすでに存在していたし、生育した蜀の地は、天下第一、二を争う、紙の生産地だったのである。〈紙〉に関しての題跋が少ないのも、〈紙〉に対しての興味が少ないからではなく、〈紙〉に恵まれていたため、とりたてて述べるまでもなかったと考えることができる。ただ南方に流された時にはやはり筆の例にみられるように、良質のものを入手して保存することはできなかったように思われる。

なお澄心堂紙は、蘇軾の代表作「黄州寒食詩卷」が書かれている紙がそうであり、奇しくもその跋を黄庭堅が記している。この詩巻のように、蘇軾と黄庭堅が相ならんで、しかもこの上もない名蹟が残っている例はこれより他にはないといってよい。もともと、蘇軾の書ののちに黄庭堅が題跋を記した例はほかにもかなりあったようである。書いて

ったのである。いや、技法にこだわればこそ、紙を挾ばなかったのである。

このように、紙に関しては、蘇軾・黄庭堅ともにあまり多くを記しておらず、文房四宝の中でもこのほか興味のない対象であったようである。

六、結 言

蘇軾と黄庭堅——「蘇・黄」と並称され、意を重視する立場、すなわち人間の個性を重視する立場の代表として従来、常に一つのまとまったものとされてきた二人であるが、文房四宝(筆・墨・硯・紙)に対する見解を比較してみると、共通点と共に、多くの相違点も存在した。また二人はともに書家としてだけでなく、詩の方でも「蘇・黄」と並称され宋を代表する詩人として知られる。従来、詩の方面の研究はかなり以前からなされていたが、書とその周辺の研究は、まだそれほどなされてはおらず、二人の比較が論じられることも、それほど多くはないように思われる。以下、管見により判明した事項をまとめる。

蘇軾は文房四宝(筆・墨・硯・紙)のうち、〈墨〉に対しては格別の愛着を示していた。しかし、〈筆〉・〈硯〉・〈紙〉については、格別の愛着といったものを題跋にみることはできなかった。題跋にみることはできたのは、

〈筆〉に対しての実用性（使いやすく耐久力があること）の重視、〈硯〉に対しての実用性（墨色の良さと発墨の良さ）の重視、〈紙〉に対してのこだわりのなさであった。もちろん、好みの筆墨硯紙はあったわけで、それらは明示されており、これらに対する研究も黄庭堅に比べかなりなされていた。

一方、黄庭堅は文房四宝に対してほとんど興味を示していない。〈筆〉と〈墨〉にはいくらか興味があったようであるが、〈硯〉と〈紙〉に関してはまったくといってよいほど興味を示していない。その原因は、黄庭堅が技術（筆法）を非常に重視していたためと考えられる。そして、二人の文房四宝に対する見解が大きく異なる原因は、技術（筆法）に対する見解の相異が大きく作用していると思われる。

本稿は「題跋」というごく限られたものを対象に、蘇軾と黄庭堅の文房四宝に対する考えを探っている。二人の詩や他の文等に対する考察も加えれば、また違う結論も出て来ると思われる。今後の課題としたい。

（注）

○解説の参考としては左を利用した。学恩に対し謝意を表したい。

・『中国書論大系』第四巻・宋1（二玄社・一九八一・中田勇次郎編）所収「東坡題跋」（杉村邦彦訳）

・『東坡題跋——書芸篇』（木耳社・一九八九・高畑常信訳）
・『中国書論大系』第四巻・宋1（二玄社・一九八一・中田勇次郎編）所収「山谷題跋」（足立豊訳）
・『黄庭堅』（二玄社・一九九四・中田勇次郎著）
○因みに、『京都語文』の表紙絵は、正倉院宝物である。第一号に紙、第二号に硯、第三号に筆が掲載されている。